令和４年５月１３日

令和３年度　特別の教育課程の実施状況等について

栃木県		
学　校　名	管理機関名	設置者の別
足利市立梁田小学校	足利市教育委員会	公立

１．特別の教育課程を編成・実施している学校及び自己評価・学校関係者評価の結果公表に関する情報

学　校　名	自己評価結果の公表	学校関係者評価結果の公表
足利市立梁田小学校	https://www.city.ashikaga.tochigi.jp/soshiki/a95/	https://www.city.ashikaga.tochigi.jp/soshiki/a95/

２．特別の教育課程の内容

（１）特別の教育課程の概要

本市全小学校において、平成１５年度より取り組んできた英会話学習の内容と外国語活動・外国語科の内容を関連づけた独自の年間指導計画を作成し、「話すこと」「聞くこと」に特化した指導を行うことで、英語によるコミュニケーション能力の育成を図る。

必要となる教育課程の基準の特例については、「【教育課程特例校】特別の教育課程の実施状況等について（足利市）」を参照。

３．特別の教育課程の実施状況に関する把握・検証結果

（１）特別の教育課程編成・実施計画に基づく教育の実施状況

⊙計画通り実施できている

・一部、計画通り実施できていない

・ほとんど計画通り実施できていない

（２）保護者及び地域住民その他の関係者に対する情報提供の状況

⊙実施している

・実施していない

（３）自校における評価

・第１学年から英会話学習を実施し、英語の発音やリズムに触れ、楽しく活動することにより、低学年児童の英語への興味・関心が高まった。

・第１学年から英会話学習を実施し、身近な場面での英会話を使って練習することにより、英語の表現に慣れ親しみ、コミュニケーションをする楽しさを味わえるようになってきた。また、日常生活で使われる簡単な英会話を用いて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする児童が増えた。

・高学年では、音声で十分慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を書き写すことができるようになった児童が増えた。

（４）学校関係者による評価

＜児童＞

・英会話学習を楽しんで行っている児童が多く見られる。

・EAA や ALT との活動で、ネイティブの英語を聞く機会が増えた。

・「英語チャレンジ DAY」（５・６年生）の実施により、英語を使う体験を通して、英語による実践的なコミュニケーションの基礎的な能力を培うことにつながっている。

＜保護者＞

・第１学年からの英会話学習を実施することにより、英語によるコミュニケーションの基礎的な能力の育成につながっていると感じる保護者が増えている。

・第１学年からの英会話学習を実施することにより、英語に慣れ親しむことにつながっていると感じる保護者が多くいた。

・第１学年からの英会話学習を実施することにより、外国語や外国の文化に対する興味・関心が高まり、外国人に対する親しみや親近感が増していると感じている保護者が増えた。

４．　実施の効果及び課題

〇「英語チャレンジ DAY」（５・６年生）の実施により、EAA や ALT と触れあう時間が多くなり、外国語で会話をする楽しさを感じ、コミュニケーションを図ろうとする態度が身に付いてきた。

▲英会話学習を苦手に感じる児童の中には、「英語チャレンジ DAY」（５・６年生）が苦痛であると感じた児童が、少数見受けられた。

〇第１学年から英会話学習を実施することにより、自然に英単語のイントネーションや発音を身に付けることができた。また、高学年になると簡単な会話文であれば、何を言っているのか聞き取ろうという態度で学習に望んでいる児童が増えた。

▲どの学年も聞き取る力に差があり、EAA や ALT の発音をまねして発音しようとする意欲に差が見られた。

５．課題の改善のための取組の方向性

英会話学習の目標は、英会話学習を通じて、英語の発音に慣れ、英語を積極的に使おうとする態度を養うとともに、自分の考えを相手に伝えたり、相手の意見を正しく聞いたりするなど、英語によるコミュニケーションの基礎的な能力を培うことである。そのため、指導計画作成に当たっては、小学校１年生から中学校３年生までを見通し、それぞれの発達の段階を考慮して作成することが必要であり、重要となる。また、体験的な活動の中で、楽しみながら英語に親しむことができるように作成することも重要となる。よって、以下の点に留意して年間指導計画を作成し、評価・改善する。

（１） めあてを提示し、ゴールを明確にする。

単元導入時には、この単元でどんなことを学習するかを明確にし、めあてを提示することで、単元の見通しをもたせ、学習意欲の向上につなげる。

（２） 一斉授業だけでなく、いろいろな学習形態を工夫する。

個人で、ペアで、グループでなどを形態として取り入れる。また、学習したことを授業の後半に発表する場を設定する。

（３） クラスルームイングリッシュを使う。

指示がうまく通らないことも考えられるので、ジェスチャーや ALT を活用して動けるように訓練する。

（４） 聞くことに焦点を当てる。

音声を中心とした授業をすすめるが、特に聞くことを大切にする。「話す」ことより「聞ける」、「分かる」ことを重視する。

（５） EAA や ALT と連携を図る。

EAA や ALT との打合せを行い、授業を組み立て、児童が楽しみながら英会話を学べるように連携する。

（６）類推する力を育てる。

授業の導入時に、HLT と EAA や ALT でティーチャーズトークを行い、児童の類推する力を育てる。